

完了報告書

記入年月日 2026年 2月 16日

採択団体名 南濃コミュニティ防災教育実行委員会

■事業概要

基本情報	
事業名	南濃生活防災カールブリック事業『誰ひとり取り残さない地域防災の実践』
事業内容	事業内容①:先進地での学びを通じた防災リーダーの育成 事業内容②:身近な活動を通じた生活防災力の育成 事業内容③:生活防災カールブリックによる評価と改善
事業背景	海津市は長年大きな災害が発生していないものの、立地的には災害リスクの大会地域である。また市内では防災士会が活発に活動しており、他地域と比べてもさまざまな取組がなされている。一方で、地域全体に目を向けると防災への関心の低い住民がまだまだ多い状況である。海津市の中でも、今回の対象地域として中心に据えた南濃地域石津地区は古くからの住民が多い地域であり、高齢者も多く居住している。 今回は、防災士会を主体に、地区の多様な主体(自治連合会、民生児童委員協議会、各種団体、地元企業等)が連携することで地域の「自助・共助」を考えてもらい、地域防災力向上を目指す。この取り組みによって、地域で活動している防災士が「防災力の向上に関する一定の基準」を見出し、モデル地区のような取り組みを全市に広げていくことが可能となる。
コミュニティ 設立の経緯	海津市では、防災士による取り組みが市全域でなされるとともに、各地区でも取り組みが行われてきたが、能登地震を体験し、今までの考え方はままならない避難所運営、また災害関連死を考える上で、初心に戻りはじめから出直す事を計画。本事業ではTEAM 石津防災士を中心に、南濃地域全体での取り組みとし住民の参加を促すために自治連合会との連携は必須と考えた。また、もう一度石津地区社協と手を組み、小学校区での活動を再開するためにも関わってもらう事を決定。災害時の避難には福祉的視点が必須と考え、民生委員児童委員協議会。災害時の炊出しの観点から日赤奉仕団海津地区にも関与。さらに、この取り組みの今後を見据え、市全域での展開を進めるため海津防災士会にも適宜関わってもらうこととした。 また事業について地域の人たちに「これまでの取り組みの延長」でないことを意識してもらうため、学術的な側面からアドバイスをもらい、効果を明確に参加者に伝えていくため、学識経験者にも参画いただいた。
本事業に関する過去の 取り組み内容	・石津地区社協と連携し、小学校での避難訓練。 ・能登への災害ボランティア参加
事業体制	・TEAM 石津防災士:事業全体に関する統括及び調整、コア防災力スキルの策定 ・海津市自治連合会南濃ブロック:事業全体に関して住民参加の促進と自治会の意識改革 ・石津地区自治連合会:事業全体に関して住民参加の促進と自主防災組織の見直し ・石津地区社会福祉協議会:特に事業内容②に関与。防災訓練の企画運営サポート、要支援者の防災生活力スキルの策定に関するアドバイス ・海津市南濃地区民生委員児童委員協議会:特に事業内容②に関与。要配慮者支援、要支援者の防災生活力スキルの策定、個別避難計画の策定に関するアドバイス。 ・海津防災士会:特に事業内容②に関与。講座開催における運営サポート、防災訓練実施サポート 60名 ・岐阜大学高等研究地域減災研究センター小山真紀センター長:事業全体に関する指導・助言、ループブリック開発、学術的評価 ・名古屋工業大学創造工学教育推進センター牧野友紀准教授:事業全体に関する指導・助言。事業①では東北に同行支援。ループブリック開発、学術的評価、評価指標の設計

全体スケジュール	<p><9月～10月></p> <ul style="list-style-type: none"> ・能登半島被災地フィールドワーク① ・生活防災力ワークショップの開催① <p><11月～12月></p> <ul style="list-style-type: none"> ・東日本大震災被災地フィールドワーク② ・大規模防災訓練の実施 ・生活防災力ワークショップの開催② <p><1月～2月></p> <ul style="list-style-type: none"> ・別府モデル実践に関わるフィールドワーク③ ・生活防災力ワークショップの開催③
事業目標・事業成果	
事業目標全般 (教育提供者側)	<p>■防災教育の提供者(採択団体および協力団体)</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 防災能力の向上:「コア防災力」が向上する。提供者同士で学びあい、教え合いの文化を醸成する。 ② 地域防災力の可視化と改善: ルーブリックによる評価でコア防災力と生活防災力のスキルを定量的に把握する。 ③ 包摂性と持続性の確保:「教え手」「実践者」として生活防災力の担い手としての継続性を確保する。 ④ 横展開の可能性:「防災生活力」ポートフォリオを作成し、ルーブリック評価の取り組みについて理解を深め普及者となる。
事業成果全般 (教育提供者)	<ol style="list-style-type: none"> ① 教え合いの文化を醸成することで、継続した取り組みにつながる ② コア防災力と生活防災力のスキルを定量的に把握することで、自己研鑽と団体全体の防災力向上につながる。 ③ 「教え手」「実践者」として生活防災力の担い手としての継続性が確保されることで、事業終了後も教え合い文化が定着し、事業の成果物を活用した継続活動が可能となる。 ④ 横展開の可能性:「防災生活力」ポートフォリオおよびルーブリック評価を継続することで、地域防災力向上の担い手として活動し、地域防災力が向上する。
事業目標全般 (参加者側)	<p>■防災教育の参加者</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 住民の防災意識:「生活防災力」の向上を目指す。防災を自分事として認識し、自発的な活動に取り組むようになることと、学び合い文化を整備できる。 ② 地域防災力の可視化と改善: ルーブリックによる評価によって、住民自身および地域全体の生活防災力について定量的に地域防災力を把握する。 ③ 包摂性と持続性の確保: 要配慮者を含むすべての住民が「学び手」として生活防災力について意識する。
事業成果全般 (参加者側)	<ol style="list-style-type: none"> ① 防災を自分事として認識し、自発的な活動に取り組むようになることで、地域の結束力も高まる。結果として地域の防災力も向上する。 ② 住民自身および地域全体の生活防災力を定量的に把握し、弱い部分を改善していくことで災害時の被害を最小限に抑える基盤を築く。 ③ 要配慮者を含むすべての住民が地域の一員として生活防災力について意識する。その結果として孤立防止と心のケアが促進される。
展開できる 知見やノウハウ	<p>防災を日常化する「生活防災力」を導入し、ルーブリックで成長を可視化する。ルーブリック評価によって提供者および参加者の意識や能力の向上が明確になれば、近隣および他地域での導入促進につながる。</p> <p>地域の取り組みにおいて学識経験者との連携事例を見せることで、大学との連携に対する意識的なハードルを下げることに繋がる。また学術的な背景を持った取り組みは客観的な妥当性を確保する。</p> <p>行政の計画と連動することで、補助事業終了後も持続性を確保できる事例とする。</p>

<p>コミュニティ防災教育の重要な観点</p>	<p>「生活防災力」という視点で具体的な目標設定が、これまでできていなかった。また「防災意識」というあいまいな表現しかできていなかった部分にルーブリック評価を導入することで現状を定量的な指標で可視化することは、地域全体の防災力の向上につながる。</p> <p>学識経験者との連携は、これまで一部の指導者に限定して行われていたが、地域全体の取り組みに積極的に関わってもらうことで、地域の活動者がより高いレベルの防災教育に触れることができ、今後の能力向上にもつながっていくと考えている。</p> <p>事業を通じて行政の計画と連動することで、これまでの関係性の強化を図るとともに、団体と行政の協働意識を向上させる。結果として事業終了後も持続性を確保できると考えており、実践性を高めている。</p>
<p>残課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ルーブリック評価について、防災士会の中では徐々に効果等が認識されつつあるものの、地域住民にとっては「何か変わったことをしている」という意識でしか受け止められていない。 ・ワークショップ③で、改めてルーブリック評価について説明し、グループワークでは評価指標(自分たちにできそうなこと)について考えてもらうことができた。まずは実践内容(評価軸)について考えていただき、それについて具体的な達成度を考えてもらう必要がある。 ・先進地視察の効果について可視化することはできていない。学びを咀嚼し、参加した各自の能力向上につなげていくためには今しばらくの時間が必要で、そのための振り返りについては事業完了後になると思われる。 ・今後、視察について振り返る機会を視察メンバーが中心となって地域に還元していくような場、取り組みが必要である。

■事業内容

事業内容① 先進地での学びを通じた防災リーダーの育成	
事業内容①目標 (提供者側)	南濃地域のリーダー候補が先進地で学ぶことで、「コア防災力(自助力、共助力、情報伝達・活用力と定義)」の向上につながり、リーダー候補が地域での能力を発揮できる状況を形成する。 既存の防災リーダー養成講座とも連携してとらえていくことで、地域全体のスキル向上を図る。 先進地で得た知見や得られたつながりを、大規模防災訓練でも活用する。
事業内容①目標 (参加者側)	防災の専門家から知識を得るだけではなく、能登半島地震、東日本大震災の被災地で現地で学習することで、「コア防災力(自助力、共助力、情報伝達・活用力と定義)」を机上ではなく、実践的な観点から習得する。 「インクルーシブ防災」を実践する大分県別府市でのフィールドワークを通じ、多様な人々が共に暮らす上での生活防災力を学ぶ。
事業内容① 実施内容 能登フィールドワーク (実施日:9/26～28)	<p>■具体的な取り組み内容</p> <p>概要 1年半たった能登の状況を見ながら、仮設住宅に住む方や、在宅避難の方々の生活の違いを実際に「見る」「聞く」「考える」3拍子で体験することで、自分たちの時はどのような状況になるのか？を身をもって感じる事ができる。 よって、現地でのボランティア活動として実際に仮設住宅や在宅の方々が集まってもらえる機会を作り、いろんな会話をとおして見える関係作りを試みた。 「集まる機会」として、足湯カフェサロンを企画。 足湯に来てもらい待ち時間の間、隣の方々とお茶を飲みながら、お菓子を食べながら喋ってもらう。 サロンの珈琲も普段飲んでいるインスタントでなく珈琲豆での珈琲提供し、「行きたい」と思ってもらえるよう企画。 また茶菓子は、地元の万屋的商店から買い出し、地元貢献にも配慮した。</p> <p>現地協力者として、地元民生委員の方にも手伝っていただき、歩ける方への広報をしていただいた。 民生委員さんの声がけという事で、安心して集まってもらう事ができた。 また足湯では、1人当たりの時間を狭めることなく使う事で、ワンツーマンで話せるキッカケ作りを大切にし、話を寸断する事がないよう心がけた。</p> <p>カフェサロンの合間に出し物を設定。 メンバーによる居合道を披露してもらった。 参加者は、見る機会が少ない居合道を真剣に見入って、来て良かったとの声が多く発せられた。 またメンバーは、地元の方へ体験できる方法を考え、新聞で作った刀を持参していた。 体験会では、指導の下、偽刀を抱えサヤへの収め方の難しさに挑戦し、簡単に見えるが奥が深いことに感銘していた。</p> <p>今回の災害ボランティア活動は穴水町で行ったが、輪島や珠洲市の復興を見学する事ができた。</p>



	<p>■成果(提供者 or 参加者)結果 (提供者から見た成果) 当日、8:00 から準備をしたが、準備をしている時から、参加者がゾロゾロ集まってきた。 待ちに待ったのように、早くから集まり、名簿に名前を書く。書くことで、どこの誰が来たのかわかる。そこから、コミュニケーションが始り、何を飲むか、何を食べるか、など会話が盛り上がってくる。 地震以来、こんなに話した事はないという言葉もらった。笑顔で来て、笑顔で帰って行く姿に次の期待を残しているのがわかるほどだった。 始めに少し話ただけで、あとは本人達が喋ってくれる。楽しそうな会話が見てわかった。 要配慮の高齢者がほとんどだったが、誰ひとり愚痴的な話はなかった。 このような事から、要配慮者の扱い方、優先させるべき事、気遣いを学ぶ事ができ、民生委員でなくても、要配慮者への対応ができるようになった。</p> <p>(参加者から見た成果、結果) 地震で閉ざされていた「仲間との会話」を実現させることにより、家の中で塞ぐことがなくなり、フレイル予防につながる。 外にでかける事が、マンネリの脱出とし、楽しかった事で脱出を試みるキッカケになった。 外と繋がる事で、かかえている問題を自分だけで抱えず、回りに相談できるようになる。 そういう先走り目線の役割になった。</p>	
<p>事業内容① 実施内容 東北フィールドワーク (実施日:11/1~3)</p>	<p>■具体的な取り組み内容</p> <p>1. 概要:「コア防災力(自助・共助・情報活用)」の実践知を獲得するため、東日本大震災の被災地である岩手県陸前高田市において、1泊 2 日のフィールドワークを実施した。単なる遺構見学にとどまらず、現地での観察記録(フィールドノート)を作成し、南濃地域での実装に向けた学習を行った。</p> <p>2. 主な行程と活動: (1)東日本大震災津波伝承館(フェーズ1):三陸の津波災害の歴史や震災の事実、教訓を体系的に学んだ。展示を通じて津波の脅威と破壊力を再確認するとともに、「逃げる・助ける・支える」といった被災時の具体的行動を学ぶことで、自然災害に強い地域社会をどう実現するかを考える機会となった。 (2)3.11 仮設住宅体験館(フェーズ2):実際の仮設住宅を再現した施設で、当時の暮らしを体験。「寒さ」「狭さ」「音」といった生活環境のリアリティを肌で感じ、仮設住宅の課題や限界と生活の工夫のあり方を調査した。 (3)語り部講話(フェーズ3) 元仮設住宅自治会長から講話を受けた。「避難所は誰が運営すべきか」「支援物資の優先順位など」発災直後から避難生活のタイムラインに沿った運営ノウハウを聴取した。</p> <p>3. フィールド調査手法: 参加者は専用のフィールドノートを使用した。フィールドノートを書く観点として3つの枠を定めた。 枠①自助力:自分と家族が“今ある環境”で楽に・安</p>	 

全に暮らす工夫とは？
 枠②共助力:その場にいる人同士で“場を回す”工夫とは？
 枠③情報伝達/活用力:相手に「届く」とみんなで「使える」を両立させる工夫とは？
 記録に当たっては、6つのタグ(①これはよいと感じる②試してみたい③自身の衝撃や示唆を受ける④抜けていることや未整備なもの⑤問題やリスクがある⑥すぐ真似できる)を付けるように設計した。参加者は、漫然とした見学ではなく「南濃に持ち帰るべき知恵」を能動的に収集した。

■成果(提供者 or 参加者)
 4.成果(提供者または参加者)
 提供者(実行委員会)の成果
 ルーブリックへの実装:

現地調査で収集した具体的な記録が、後のワークショップで策定する「南濃型ルーブリック」の基礎データになった。特に「トイレの処理法」、「寒さ対策」、「空間管理」の項目は、現地の知恵が直接反映されている。

参加者の成果

多角的な視点の獲得と具体策の発見:

参加者は現地の観察において、3つの枠(コア防災力の観点)と6つのタグ(情報の性質)をつなぎ合わせるフィールドノート記録により、漫然とした感想を回避することができた。南濃地域の生活実情に応じた「翻訳」をすることができた。

具体的には、(1)＜枠①自助力-④抜けていることや未整備なもの、⑤問題やリスクがある＞については、「我慢の可視化」による気づきをえた。仮設住宅体験において、20時以降のシャワー音、隣家のアラーム音といった音の問題や基礎が高くても底冷えする寒さを書きとった。これらにより、配慮することは我慢であるという避難生活の現実を痛感し、仮設住宅の整備だけでは解決できない、住環境のルールづくりの重要性を発見していた。

(2)＜枠②共助力-②試してみたい、③示唆を受ける＞については、精神論ではない仕組みとしての共助を学んだ。孤独死対策として実施された「プランターの野菜栽培(枯れていたら当人に異変)」や孤立防止のための「子どもがいる世帯の同室配置」などの事例を②試してみたいというタグとして記録。また、公平性を担保し不満を吸い上げるリーダーの役割を③重要な示唆として認識した。(3)＜枠③情報活用力-①これは良いと感じる⑥すぐ真似できる＞については、アナログコミュニケーションの価値を再発見した。膨大な申請書類(情報過多)への対策として、お茶会を通じて情報を噛み砕いて共有する手法をすぐ⑥真似できるとして記録。また「津波てんでんこ」の精神を自分自身が生き残ることが結果として他者を救うというメッセージ①を捉え、住民への啓発の核を得ることができた。



事業内容①
実施内容
別府フィールドワーク
(実施日:
1/10~12)

■具体的な取組み
1 概要
インクルーシブ防災「別府モデル」を実践する別府市への2泊3日フィールドワークを実施。
参加予定10名の所、自治会長を含む14名が参加。メンバー全員が自ら参加を強く希望した。「別府モデル」への研修成果への期待が増す。
参加者のうち2名は市の職員。危機管理室から1名、個別避難計画の担当者1名が参加。

2 主な行程と活動
(1)別府市で熊本地震の際に災害が多かった場所を視察し、現地の地形と火山の位置などの活断層地域を確認。現実的に「眼」で見ることによって防災意識の変化を感じた。

(2)ここ別府では「地獄」とよばれ湧き上がる温泉がある。それがどこからどのように時間を経て湧き出ているのか、その地熱と火山の関係はどうか？ 噴き上がる湯煙に関係があるのか、別府市内の2大活火山の姿を遠くから見ながら、別府という小さい範囲で、多くの違う泉質が湧き出る不思議を体験。雪のため、活火山火口まで行けなかったことが残念。代わりに見学した「地獄巡り」2カ所。湧き出る高温(98°)の温泉は、約1200年前に活火山鶴見岳噴火の際にできた熱泉の1つ。泉脈まで深さ120Mと知る。

(3)最大の目的「別府モデル」の実践について、別府市企画戦略部 政策企画課政策連携係 村野淳子氏より「地域とともに多様な団体・組織と進める別府インクルーシブ防災“誰ひとり取り残さない防災”」を講演していただいた。インクルーシブ防災を取組むきっかけから始まり、多様な団体と行う取組み(福祉フォーラム IN 別府速見実行委員会との協働)。別府市が策定した、『ともに生きる条例』。別府市インクルーシブ防災事業の経緯。地域住民への説明会での意見の対立や、どうすれば先に進むことができたか。障がい当事者の方と一緒に訓練することで得られたものは何か。どんな支援が必要なのか「みんなが助かるために」を協議しながら支援内容を決定するという方法を聞き、会場はうなずく。これは、研修の中身と村野氏の熱意が直接伝わって、自分達に熱い思いとなって残った。
まずは防災を自分ごととして捉える事が大事だという事に気づかされ、次のステップへの橋渡しとなった。
また、実際の災害において困る事や、災害を材料にした企業の存在など、普段わからないことを知る事ができ、注意すべき事が少し理解できたように思う。

(4)ゆめタウン内にて別府市危機管理によるシンポジウム開催の見学。
著名人による防災トークショーや能登町から当時社協だった方が登壇。生々しい当時の状況を話していただいた。また、別府の温泉を運んでいただけた事に感謝され、別府市長も同席していた。



<p>事業内容①を実施 する中で発生した 課題や失敗点</p>	<p>■発生した課題や失敗点</p> <p>①能登フィールドワーク 先発隊が 9/26 の昼に出発し会場内の設置や準備を担当予定のところ、先発隊に病人が発生したため、後発隊が担当する事になった。準備なども不可能になった。後発隊は 9/27 早朝出発予定。9/27 朝から開催のため、海津を朝出発したのでは間に合わない、準備もできないかといって、後発隊のメンバーは 9/26 仕事なので夜の出発でないと無理がある。夜に出発したのでは 2 泊になる。(予算計上は 1 泊) また、足湯、カフェサロン準備中に、参加者が集まってくる。とりあえずカフェサロンで待機させるも、人数が多くなり、時間的にもこれ以上待機できない状態になった。</p> <p>②東北フィールドワーク 公共機関での往復。7 名で現地まで移動。三連休のためホームに人が多く、移動に苦労した。新幹線は満席。乗り間違えると次がない状態。切符の先購入ができない区間があり、乗換時間が少ない中切符購入の時間がとれなかった。</p> <p>③別府フィールドワーク 片道、船(フェリー)を使った。 船酔いを心配するも、瀬戸内海航路なので揺れは最小。所がこの日は日本海側を中心に大雪。海上の風が強く想定以上にゆれたため体調不良者発生。また現地は珍しく降雪のため、予定どおりの見学ができず、活火山(伽藍岳)の火口の見学など断念した。この火山は別府温泉の全ての源であるとも言われている事もあって、興味深いはずだった。 村野淳子氏の研修会は 2 時間ほど予定していたが、自分の立場からの質疑が多くあり、時間オーバーするも、まだまだ足りない状況だった。また来たいという声が聞こえた。 岐阜から行くため、会場の段取りを先方をお願いすることになった。日曜日なのに市役所を開放して研修会場としていただけの事にみんなが驚いた。</p> <p>■乗り越えた方法</p> <p>①9/27 宿泊先の民宿と 9/26 の夜間に到着し、朝まで仮眠できるよう交渉。(1.5 泊) 待機者を減らすため、足湯を準備段階で開始した。不足な物が多発。 ②なるべく乗換時間を長くした。少ない乗換時間の区間は、回数券を先購入し対応。 ③活火山の火口見学は断念するも、地獄を 2 カ所見学する事でその原理を少し知る事ができた。 観光地のため当初は予定していなかった地獄巡りだが、火山見学に代わるものとして見学。</p>
<p>事業内容①を実施 する上で工夫した 点</p>	<p>①能登フィールドワーク 準備に追われ、カフェサロンの中身を企画できていなかったが、メンバーに居合道をやっている者がいたので、それを披露してもらった。直前の計画だったが、結果的に名案だったことからメンバーのあだ名が決まる「師匠」。</p> <p>③別府フィールドワーク 予定人数 10 名の所を 14 名が参加。往復新幹線利用の所だが、予算オーバーのため片道船(フェリー)を使った。船内 1 泊、現地 1 泊を企画する事ができ、予算内にて実現できた。 これによって、日頃選択されない船旅に参加者の賛同を得ることができた。 また最近の宿泊代の高騰により、予算内での宿泊が難しかったが、たまたま安価なホテルを発見。これもたまたま「インクルーシブ」と名乗っていたので、【別府インクルーシブ防災事業の研修に「インクルーシブのホテル】と印象づける事で、別府モデルを人ごとではなく、身近に感じてもらえるよう工夫。</p>
<p>事業内容① 残課題等</p>	<p>(中間報告時) この事業において活動が多いため、1 つの活動にかかる時間が足りない 時間不足＝企画不足 ・この事が原因で、あらゆる企画が遅くなり、チラシや啓発に遅れが生じ、集客に力を入れる事ができなくなった ・各活動に対しての資料作りができなかった ・何事も、直前で啓発なので、無理があった →直前の企画が多く、考えていた講師をお呼びすることができなかった。もう少しゆとりを持ちたい。</p> <p>(完了報告時) ・全体的にもう少し時間があれば、もっとよい企画ができたのではないかと、100%でないことが少し残念。しかし、そのような状況でも、助け合い協力することができたと言うことは結果につながった。 ・今後、この結果をどのように展開していくかが課題として残る。</p>

	<p>各フィールドワークで作成したワークシートを参考にしながら、この先のステップに進めていきたい。 ・視察では、コアメンバーが様々な知見を得ることができた一方で、それらを振り返って共有し、地域に還元する手法については検討できていない。今後、視察に参加できなかったメンバーにも改めて知見を共有してコア防災力を向上させ、地域の生活防災力向上につなげて行く事が求められる。</p>
事業内容② 身近な活動を通じた生活防災力の育成	
事業内容②目標 (提供者側)	<p>防災士だけでなく、地域の方を含めたワークショップを実施することで防災士会の取り組みを周知する。 普段の暮らしの延長線上にある防災スキルを「生活維持・衛生系」「空間・秩序管理系」「健康・安全維持系」「情報・コミュニケーション系」の4領域でルーブリックを体系化することで、今後の防災活動に関する効果を可視化するツールを手に入れることになる。</p>
事業内容②目標 (参加者側)	<p>生活防災力ワークショップに参加することで、地域で取り組む防災への関心が高まる。 ワorkshopを通じて、防災スキルは「普段の暮らしの延長線上にある」ことの気づきが得られる。</p>
事業内容② 実施内容 防災研修& ワークショップ1 (実施日:10/12)	<div style="display: flex;"> <div style="flex: 1;"> <p>■具体的な取り組み内容 海津市防災士会と協力して実施した防災研修の中で、ワークショップを実施。 研修では能登半島での被災地支援について、藤田医科大学の若月徹教授および大学院生による報告を受けた後、穴水町の看護師や看護大生の取り組みについて紹介した。 報告では高齢化が進行する日本において必要となる支援や、初めてボランティア活動をした際の気持ちやその変化について語られた。 また、防災士に期待されることや、キーとなる人材の重要性、Web を通じた学びなどについても紹介された。 若月教授からはそのほかにも大学としての使命や、使命に基づく取り組みも紹介があった。 災害時に課題となるトイレの問題、簡易ベッドの利用、食事の課題なども紹介され、参加者は熱心に聞き入っていた。 ワorkshopについては参加者が80名程度と想定より多かったため、グループワークではなく個人のワークとして取り組んでもらった。 ワorkshopでは用意したシートに以下の事柄について記入してもらった。 ・研修の話題提供から気づいた事柄 ・普段の生活の中でできる、「災害に備える行動」(できる限りたくさん) ワorkshopシートは回収し、書かれた内容を集約してルーブリックの内容に活用することとした。</p> <p>ワorkshop終了後にはコアとなるメンバーで事業全体に関して確認する場を設けた。</p> <p>■成果 提供者(コアメンバー) 提供者(コアメンバー)としては、ルーブリックのベースとなるワークシートに記入した上で改めて事業全体について把握することで、自分たちの実施している事柄の意義について知ることができた。</p> <p>参加者 参加者としては自身の防災への取り組みについて改めて考えるきっかけとすることができた。</p> </div> <div style="flex: 1;">    </div> </div>

事業内容②
実施内容
大規模訓練 &
ワークショップ2
(実施日:12/7)

■具体的な取り組み内容

概要
午前中に大規模訓練、午後にワークショップを開催した。

★大規模訓練

避難所の「災害関連死を減らすために備える事」を学ぶ。

海津市危機管理室からマイナンバーカードを使った避難受付の訓練をした。もちろんナシの場合でも受付。危機管理室長自ら受付に立ち、住民の状況を把握。日頃から訓練することで、足りない部分や、問題点がわかるよう努めた。

TEAM 石津防災士のメンバーのほか中学生ボランティア約 12 名も活躍した。

受付を済ませた避難者は、2 人ずつ組んだ中学生ボランティアの誘導にしたがって順次体育館に入り各展示コーナーを体験。

まずは、説明がない状態で体験。後で説明されてから、その展示の意図がわかるよう設定。

避難者は、ワークシートを手渡され、それに答えながらブースを回る。

日赤奉仕団のメンバーによる炊き出し(ハイゼックスによる炊飯とレトルトカレー)も行われ、被災地で大事な炊き出しをいかにするかを訓練。これには、海津市健康福祉部社会福祉課がヘルメット着用し、部長、課長、職員が総力で応援。

南濃地区民生委員児童委員協議会が中心になり、災害時の避難所でのカフェサロンを開催、一緒にお茶を飲むことで被災者の傾聴ができるよう訓練。高齢者の居場所としても大切であることを学ぶ。

また主任児童委員が、災害時にこどもの居場所がないために起こりうる事を想定し、こどもの遊び場を作った。

民生委員は去年 12 月で一斉改選となり、新しい民生員が多い中、南濃地区は元民生委員の OB 会「せみの会」を立上げ、全員 30 名が在籍。今後の活動に協力を依頼している。この日も大勢が手伝うために参加。協働の姿勢が定着しつつある事を実感する。

阪神淡路大震災の時、近隣の人から助け出された人数の多さから、イザという時に自分達にもできる傷病者への対応を消防から伝授。

警察からは、災害が起きたときの注意点として地域安全に関する講話をいただいた。

避難所の不便さを明確化し、冷たい床と寒さを直に体験する事で、避難する時の準備に目覚めもらえるように、また避難所で起こりうる事例を、実際に再現し、眼で見る事で危機感を持ってもらえるよう設定。

足湯の効力を待機して説明(海津市防災士会)

認知症の疑いがある避難者(海津市防災士会)や見るからに不気味な男性避難者を演じる TEAM 石津防災士のメンバーは、こんな時どう対応すれば良いのかを学ぶ機会を作った。

よくある盗難について、海津市職員が泥棒役を演じ



会場から笑い声がでた。今は笑えても、盗難に直面しないためにもパトロールの強化を自治会単位でやることを推奨。

災害関連死に直結する災害時のトイレは入念に指導。いろいろなトイレやトイレ個室の展示。

ラップオン(全自動)トイレも展示し、購入でなく誰でも使えるように、使い方を指導。

避難所のトイレは汚れる前に、トイレキットを使用することを指導。

300名近い方たちが参加され、参加した方たちは体育館に設置された避難所の物品について見学や体験をした上で説明を受け、実際に避難することを想像しながら日頃の備え、地域のつながりづくりについて考えるきっかけとしていた。

この日の集客は、主に自治連合南濃ブロック会長、自治連合石津地区代表者会長が奮闘していただいた結果であり、各自治会長さんが、それぞれの地区から参加してもらう事で、横に拡散する事ができた。石津地区社協からは、炊出しに使うマキを提供。地区社協事務所から城南中学校まで運び出すことに苦勞。それぞれ軽トラックを持出し、対応にあたっていただいた。

また日赤岐阜県支部からは、炊出しに使う道具の貸出や運搬をしてもらう事ができた。

★ワークショップ 2

ワークには60名ほどが参加した。

導入として「防寒ミニ実験」を行い、新聞紙やゴミ袋、段ボールを用いて各自が工夫しながら防寒対策を考えている様子が見られた。また、少ない椅子を有効に使うためのルール作りについてもグループで検討し、実際の避難生活で重要となる「みんなで納得できるやり方を決めていく」「自分たちなりに工夫する」ことを学んだ。

また避難所の配置計画を考えるワークでは、衛生環境を保ちながら導線も確保する避難所運営について検討した。

最後に、第1回ワークショップで得られた成果に基づいて作成したルーブリック表を用いて「各自の防災に対する取り組み状況」を計測した。

■成果

提供者(コアメンバー)

南濃地区全域で初めて開催した大規模訓練では、準備から設置、片付けまでを手分けして行うことで、チーム力の向上を図ることができた。

ワークショップではグループのファシリテーターを務めることで、地域の防災リーダーとしての役割について改めて考えることができた。

参加者

大規模訓練では、普段は目にすることのない避難所の設備について実際に触れ、自分たちが避難する状況を具体的に想像することにつながった。

ワークショップでは、避難生活で必要となる「あるもので工夫すること」「みんなが納得する決め方」について体験することで、地域の防災力(災害対応力)の向上につなげることができた。



事業内容②
実施内容
ワークショップ 3
&シンポジウム
(実施日:2/8)

■具体的な取り組み内容
午後を2部制に分け、まずはワークショップを実施した。その後、今年度の取り組み全体を振り返る場として地域の方たちに集まってもらうシンポジウムを開催した。
生活防災カワークショップは、定員を50名としていたが、各自治会からの呼びかけにより想定をはるかに超える70名以上から申込があり、当日参加も含めて100名ほどの参加となった。ワークショップの実施に向けては、実行委員メンバーが中心となってファシリテーターを務めることとし、当日の進行方法やワークの内容については事前に説明を行い、円滑なグループワークが行えるように準備をした。ワークでは過去2回のふり返りと共有を行い、ループリック表について「地域で行っておく事柄」について意見を出してもらった。
シンポジウムには、ワーク参加者の大部分が残った上で更に地域の方たちの参加もあり、120名を超える方の参加があった。最初に穴水町社会福祉協議会の吉田氏より、災害時に地域の人たちがどう動いたか、何を考えていたかなど、支援を担った当事者の視点からお話しいただき、参加者が「自分たちだったら」と考えるきっかけを作ってくれた。続いて津津市の防災担当者から市としての取り組みや、別府視察で得られた知見について報告があり、最後に実行委員会から地域防災への思いをベースに、地域で取り組んできたこと、今後取り組んでいきたいことが語られた。会場では、参加者が各報告者の話す内容を真剣に聴いている様子が見られた。報告の後、コーディネーターの進行により各報告者からコメントが出され、以下のようなまとめが提示された。
災害時はマニュアル通りに進まない現実を前提に、地域の横のつながりと社協を核とした連携で、避難所運営と在宅被災者の見守りを機動的に進めることが重要である。誰一人取り残さない防災のために、平時から「できる人ができること」を学び合い、訓練し、ループリックで地域の実情を可視化し、更に横展開する体制を整えていく必要がある。

■成果
提供者(コアメンバー)
ワークショップではグループのファシリテーターを務めながら地域の方たちの率直な意見を伺い、地域防災の現在地と今後必要になる取り組みに関して考えることができた。
シンポジウムでは、これまでの取り組み、今年度の事業に関する取り組み、これからの展望について目線合わせにつながる内容を把握できた。

参加者
ワークショップでは、災害に対する備えについて改めて考え、また個人だけでなく地域で取り組んでおく事柄、考えて話し合っておくべき内容、備えておくべき物資についてお互いの考えを知ることができた。これは今後の地域防災の取り組みに活かされるものである。シンポジウムでは、災害時に何が起こるか知るとともに、平時の備えについて考えるきっかけを得ることができた。

「誰ひとり取り残さない地域防災」
災害に備える地域防災力
シンポジウム 参加申込 不要

2026年 2月8日(日) 14:45~16:30
場所 南濃総合福祉会館「ゆとりの森」2F

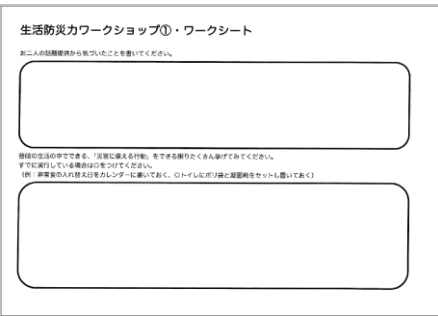
津津市南濃地域を主に、去年10月から内閣府コミュニティ防災教育事業に取り組み「南濃モデル」の構築を目指してきました。生活のなかで防災力を上げていくために、地域で防災に取り組む人たちがどうスキルアップし、どう地域の人たちに伝えていくかを考えてきました。シンポジウムでは取り組みの報告とこれからの津津市の防災力を高めていく展望について討論します。


コーディネーター 岐阜大学 准教授 小山真紀
パネリスト
石川県穴水町社会福祉協議会 吉田由紀子
名古屋工業大学 准教授 牧野友紀
津津市総務部危機管理室 室長 長谷川 淳
南濃コミュニティ防災教育実行委員会代表 磯方 徳美

主催 南濃コミュニティ防災教育実行委員会 問合せ先:090-1616-0735(イソカ)
後援 清洲の湯さか 防災・減災センター
協力 津津市 総務部危機管理室・健康福祉部社会福祉課・津津市社会福祉協議会
日本福祉協会津津地区・津津市議会 南濃ブロック・津津市自治会連合会津津地区代表者会
石津地区社会福祉協議会・南濃地区民生委員児童委員協議会・TEAM津津防災士

生活防災カ ワークショップ 最終回 定員50名
みんなで作る『そろえる・使える・回せる』
～家庭と地域をつなぐ生活防災～
2月8日(日) 13:00~14:30
南濃総合福祉会館「ゆとりの森」2F
講師 名古屋工業大学 准教授 牧野友紀
申込方法は3通り ①石起QRコードから ②自治会長さんへ ③問合せ先へ電話



<p>事業内容②を実施 する中で発生した 課題や失敗点</p>	<p>■発生した課題や失敗点 ワークショップ1 ・研修では機材トラブルによりスタートが遅れ、ワークショップの時間を削らざるを得なかった。 ・ワークショップではグループ毎にファシリテーターを配置したが、ワークショップの経験や知識に差もあり、参加者対応に苦慮する場面も見られた。</p> <p>大規模訓練 ・中学生ボランティアを募集。学校に協力依頼し、中学生ボランティアに参加してもらおう事で、学生が家庭に帰って「防災を話す」ことを現実目標とした。 そうすることで、家族ぐるみで防災意識を持ってもらうキッカケができ、また防災士を受講しようとする意識にも発展する事を目標とした。</p> <p>■乗り越えた方法 ・講師を含めてスタッフで臨機応変に打ち合わせをしながら、短時間でもループリック作成のベースとなる参加者(地域住民)の生活防災力の現状を知るためのワークシート作成までは実施することができた。 ・ファシリテーターが対応に苦慮する場面では、全体進行役が適宜サポートに入るなどして、参加者がワークの意図を理解し意見が出しやすくなるよう努めた。</p>	
<p>事業内容②を実施 する上で工夫した 点</p>	<p>TEAM 石津防災士のメンバー全員がワークショップの全体像を把握し、今後の石津地区、南濃地域、海津市全体の防災力向上に寄与できるように、情報共有に努めた。またワークショップファシリテーターは初めて務めるメンバーが多く、進行表や注意点について記載した書面を配布し、当日のミーティングで細かく説明し、不安を取り除くように努めた。</p>	
<p>事業内容② 残課題等</p>	<p>(中間報告時) ・ワークショップ3に向けた準備、課題の洗い出しが必要。 ・ワークショップを今後も実施することを見据え、ファシリテーターとしての研鑽が必要。</p> <p>(完了報告時) ・コアメンバーは今後も地域の防災力を高める人材となっていく。伝える、意見を集めるためにも、ファシリテーターとしての更なる研鑽が必要。</p>	
<p>事業内容③ 生活防災カーループリックによる評価と改善</p>		
<p>事業内容③目標 (提供者側)</p>	<p>学識経験者のサポートによって生活防災カーループリック作成し、今後も活用できるツールを得ることができる。 地域全体のスキル担い手を可視化し、不足している部分を明らかにする。 災害時要配慮者の双方向支援の視点を強化する。 シンポジウムで成果を報告し、市全体の中での優良事例としてとらえてもらうことで、今後の展開を見据える。</p>	
<p>事業内容③目標 (参加者側)</p>	<p>生活防災カーループリックを体験し、活用について学ぶことで、自身の防災スキルを定量的に把握する。先進地視察での学びと組み合わせることで災害時要配慮者への視点を強化し「誰一人取り残さない地域防災」について意識を深める。</p>	
<p>事業内容③ 実施内容 ループリック内容の 検討</p>	<p>■具体的な取り組み内容 第1回ワークショップに向けて、地域の実情に合わせたループリック表の項目の決め方について検討した。 まずは「参加者の防災力」について把握することとし、それを問うワークシートを作成した。 第1回で出された意見に基づいてループリック表を作成し、第2回で参加者に提示して生活防災力を測ってもらった。</p> <p>■成果(提供者) ワークシートの記載内容を把握し、地域の生活防災力を把握した。 「備蓄品」に関してはある程度の住民が取り組んでいるものの、「避難生活」「転倒防止」などの取り組</p>	

	<p>みは多くの方は取り組んでいない状況があり、その部分を強化するようなルーブリックの設定が必要であることが分かった。</p> <p>■成果(参加者) ※ 検討については提供者のみで実施した。</p>																																	
<p>事業内容③ 実施内容 ルーブリックのブラッシュアップ</p>	<p>■具体的な取り組み内容 第2回ワークショップで使用するルーブリック表を検討し作成した。 作成したルーブリック表はポートフォリオとして参加者が持ち帰ることができるようにして、家族や周囲への啓発に使うなど促した。また継続して活用することで、自身の防災意識向上を測る指標になることも説明した。 第3回では改めてルーブリック表を提示し、今後地域で使い続けてもらうために、追加すべき項目について検討してもらった。出された意見については取りまとめを行い、コアメンバーに還元していく。</p> <p>■成果(提供者 or 参加者) ステップ基準を参加者にチェックしてもらった。チェックの結果はグループファシリテーターが確認した。 ルーブリック表を用いた各自の生活防災力の把握では、トイレ問題や要配慮者への配慮、ゾーニングなどで、災害イメージの解像度の低さや意思決定プロセスの不慣れさが課題として浮き彫りになった。一方、ルーブリックを用いた振り返りでは、参加者に対して具体的な視点を提供できた状況が見られ、地域防災力の把握に対して手法の有効性を確認できた。</p> <p>■成果(参加者) ※ 検討については提供者のみで実施した。</p>	<p>(1) 生活防災力ルーブリック：4つの領域について</p>  <p>(2) 生活防災力ルーブリックにおけるステップ基準</p> <table border="1" data-bbox="954 712 1401 945"> <thead> <tr> <th>ステップ</th> <th>キーワード</th> <th>状態の定義 (判定チェックリスト)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ステップ1</td> <td>「そろえる」</td> <td> <input type="checkbox"/> モノと情報を持っている (必要なモノや代用品、連絡先や情報などを確保している) <input type="checkbox"/> 場所を決めている (メンバー全員がわかる「定位置」を決めている) <input type="checkbox"/> 約束を決めている (使い方や順番など、ルールを共有している) </td> </tr> <tr> <td>ステップ2</td> <td>「使える」</td> <td> <input type="checkbox"/> 試したことがある (説明書を読むだけでなく実際にやってみた) <input type="checkbox"/> 教えられる (災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける) <input type="checkbox"/> 工夫して使える (あり合わせで代用できる) </td> </tr> <tr> <td>ステップ3</td> <td>「回せる」</td> <td> <input type="checkbox"/> 続けられる (生活を維持・継続できる) <input type="checkbox"/> 教えられる (工夫を、近所の人などに伝えられる) <input type="checkbox"/> 進捗できる (家庭、避難所や地域で、みんなが使えようとする仕組みを作れる) </td> </tr> </tbody> </table> <p>(3) 生活防災力ルーブリック</p> <table border="1" data-bbox="954 990 1401 1214"> <thead> <tr> <th>4つの領域</th> <th>ステップ1: そろえる (モノ・場所・情報を揃える・工夫して揃える)</th> <th>ステップ2: 使える (試した・迷わず使える)</th> <th>ステップ3: 回せる (続けられる・教えられる・進捗できる)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>① 健康・安全維持</td> <td> <input type="checkbox"/> 災害対策に必要なモノ (避難グッズ)が揃っている (必要なモノや代用品、連絡先や情報などを確保している) <input type="checkbox"/> 場所を決めている (メンバー全員がわかる「定位置」を決めている) <input type="checkbox"/> 約束を決めている (使い方や順番など、ルールを共有している) </td> <td> <input type="checkbox"/> 避難グッズを試している (必要なモノや代用品、連絡先や情報などを確保している) <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける </td> <td> <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける </td> </tr> <tr> <td>② 生活維持・衛生</td> <td> <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける </td> <td> <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける </td> <td> <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける </td> </tr> <tr> <td>③ 空間・秩序管理</td> <td> <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける </td> <td> <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける </td> <td> <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける </td> </tr> <tr> <td>④ 情報伝達</td> <td> <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける </td> <td> <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける </td> <td> <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける </td> </tr> </tbody> </table>	ステップ	キーワード	状態の定義 (判定チェックリスト)	ステップ1	「そろえる」	<input type="checkbox"/> モノと情報を持っている (必要なモノや代用品、連絡先や情報などを確保している) <input type="checkbox"/> 場所を決めている (メンバー全員がわかる「定位置」を決めている) <input type="checkbox"/> 約束を決めている (使い方や順番など、ルールを共有している)	ステップ2	「使える」	<input type="checkbox"/> 試したことがある (説明書を読むだけでなく実際にやってみた) <input type="checkbox"/> 教えられる (災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける) <input type="checkbox"/> 工夫して使える (あり合わせで代用できる)	ステップ3	「回せる」	<input type="checkbox"/> 続けられる (生活を維持・継続できる) <input type="checkbox"/> 教えられる (工夫を、近所の人などに伝えられる) <input type="checkbox"/> 進捗できる (家庭、避難所や地域で、みんなが使えようとする仕組みを作れる)	4つの領域	ステップ1: そろえる (モノ・場所・情報を揃える・工夫して揃える)	ステップ2: 使える (試した・迷わず使える)	ステップ3: 回せる (続けられる・教えられる・進捗できる)	① 健康・安全維持	<input type="checkbox"/> 災害対策に必要なモノ (避難グッズ)が揃っている (必要なモノや代用品、連絡先や情報などを確保している) <input type="checkbox"/> 場所を決めている (メンバー全員がわかる「定位置」を決めている) <input type="checkbox"/> 約束を決めている (使い方や順番など、ルールを共有している)	<input type="checkbox"/> 避難グッズを試している (必要なモノや代用品、連絡先や情報などを確保している) <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	② 生活維持・衛生	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	③ 空間・秩序管理	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	④ 情報伝達	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける
ステップ	キーワード	状態の定義 (判定チェックリスト)																																
ステップ1	「そろえる」	<input type="checkbox"/> モノと情報を持っている (必要なモノや代用品、連絡先や情報などを確保している) <input type="checkbox"/> 場所を決めている (メンバー全員がわかる「定位置」を決めている) <input type="checkbox"/> 約束を決めている (使い方や順番など、ルールを共有している)																																
ステップ2	「使える」	<input type="checkbox"/> 試したことがある (説明書を読むだけでなく実際にやってみた) <input type="checkbox"/> 教えられる (災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける) <input type="checkbox"/> 工夫して使える (あり合わせで代用できる)																																
ステップ3	「回せる」	<input type="checkbox"/> 続けられる (生活を維持・継続できる) <input type="checkbox"/> 教えられる (工夫を、近所の人などに伝えられる) <input type="checkbox"/> 進捗できる (家庭、避難所や地域で、みんなが使えようとする仕組みを作れる)																																
4つの領域	ステップ1: そろえる (モノ・場所・情報を揃える・工夫して揃える)	ステップ2: 使える (試した・迷わず使える)	ステップ3: 回せる (続けられる・教えられる・進捗できる)																															
① 健康・安全維持	<input type="checkbox"/> 災害対策に必要なモノ (避難グッズ)が揃っている (必要なモノや代用品、連絡先や情報などを確保している) <input type="checkbox"/> 場所を決めている (メンバー全員がわかる「定位置」を決めている) <input type="checkbox"/> 約束を決めている (使い方や順番など、ルールを共有している)	<input type="checkbox"/> 避難グッズを試している (必要なモノや代用品、連絡先や情報などを確保している) <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける																															
② 生活維持・衛生	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける																															
③ 空間・秩序管理	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける																															
④ 情報伝達	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける	<input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける <input type="checkbox"/> 災害時、説明書を見なくても感覚的に動ける																															
<p>事業内容③を実施する中で発生した課題や失敗点</p>	<p>■発生した課題や失敗点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1回ワークショップではトラブルもあり時間的な制約で丁寧な説明ができなかった。 ・第3回ワークショップ直前で、学術的な背景を担保し中心となって進めていた協力者が体調不良により参加できなくなった。 ・3回のワークを通じて同じ参加者の意識がどう変化したかを把握したかったが、地域住民を対象にした意識啓発も進めたかったため、単発での参加が多く意図した通りに事業を進めることが難しかった。 <p>■乗り越えた方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップでは話題提供と結び付けて考えてもらうように説明し、研修との連携を深めることができた。 ・地域の方の意識変化をルーブリック評価により把握することはできなかったが、多くの方が参加し、さまざまな意見を拾っていくことで、地域特性や地域の実情(防災対策の現状)に合わせてルーブリック表の内容を検討するための材料とすることができた。 ・これまでの成果をある程度、実行委員会で把握し共有できていたこと、またそれに基づいて外部支援者がワークショップ準備および当日の進行を担うこと、コアメンバーが状況を理解し協力し合うことで、何とか当日を迎えてワークショップを実施することができた。コアメンバーは本事業を通じて視察に向向くなどチームワークを向上させることが出来ていた点も、柔軟な姿勢を見せながら危機を乗り越えていくことにつながったと考えている。 																																	
<p>事業内容③を実施する上で工夫した点</p>	<p>地域の方が継続的に活用できるよう、使い方についても説明し、ルーブリック表に示した内容の解説表も作成した。</p>																																	

事業内容③ 残課題等	(中間報告時) ・今後、地域で継続して活用してもらえるようなテキストの作成。 (完了報告時) ・今後、地域で継続して活用してもらえるようなテキストの作成およびループリック表の改善。
---------------	---